

ドイツ・デンマルク戦争勃発後 におけるラサールとビスマルク

田 中 友 次 郎

Lassalle und Bismarck nach dem Ausbruch des Deutsch-dänischen Krieges

TOMOJIRŌ TANAKA

さきに長崎大学紀要人文科学第18巻（1978）における拙稿「1864年1月におけるラサールとビスマルク」のなかで、ラサールが、前年11月以来激化せるドイツ・デンマルク戦争勃発の危機を、彼の政治的綱領の眼目たる直接普通選挙権欽定の好機として夢みつつビスマルクに対する説得に努めると共に、この1月に至ってもなお、前年9月ライン流域における「閱兵演説」を原因とする、取調べのためのデュッセルドルフの予審判事の強制的拘引、を免れるためビスマルクに頼ったことに論及した。

本稿の目的はそれに続く2月以来の両者関係変質の経緯を明らかにすることである。

さて、ヨハネス・ビューラーはその大著「ドイツ史」のなかで、「ヴィルヘルム一世の甥フリードリッヒ・カール親王の率いるプロイセン軍とプロイセン近衛軍の一部とが（1864年）2月1日アイダー（Eider）河を渡った」^①とししている。

けれど、シュレスヴィヒ公国は、デンマルク王クリスチャン九世が前年11月18日、1852年のロンドン議定書に違反して、これを自国に併合する憲法を公布しドイツ側の激怒を買った地域であり、ホルシュタイン公国は未だドイツ・デンマルク間に所属の決着をみていないままの地域であった。アイダー河はこの両地域の境を流れている。それゆえ、ドイツ・デンマルク戦争は、プロイセン軍のこのアイダー渡河を以て勃発したと観るのが妥当であろう。

ところでラサールはこの戦争勃発を知っていたか否かは判らぬが、その同じ日すなわち2月1日付けビスマルクあて訴願書に依って、ビスマルクがすでに遅くとも1月29日までには拘引禁止措置をとっているとはば断定される^②にも拘らずこの措置を知らずして、さらにビスマルクに頼っている。

さて、1864年2月1日付けラサールのビスマルクあて訴願書（オリジナル）は次の如くである。

「閣下、同時に閣下の手許に送付された、王国の全内閣あての公式の請願書^③から、私は、

仮りに独力で身を守ることを知っていなかったとすれば、司法大臣を物ともせず、ずっと以前にデュッセルドルフにいたであろうということをご推察下さい！

私は全内閣あての請願書によって閣下に対して今、閣議における閣下の願望についての司法大臣殿の同僚らしい思いやりに対して同大臣殿に感謝する気持を取消す機会をさしあげます。——私が十分に聞いた処では、司法大臣殿の、私という親密な敵（intimer Feind、注 皮肉な用語。）に対する抵抗は、ずっと以前から、尤もな諸理由から、ライン地方局によって、殊にハイムセト（Heimsoeth）氏によってひき起されました。司法大臣がこの際、ライン地方の旧套に相応ずる、しかし決して法的に必須的でないある見解によって、私についての同大臣殿の訓令において為したほどにみずからの権能を制限するに至ったとすれば、私が内閣に対する請願書のなかで同大臣殿の権能を強調しましたように、同大臣殿がこの権能についての、みずからゆえなく課せられたこの制限を非常に不快に思はれる場合がきわめて容易に生じ得るのであります。

私はいま、なお二つの所見を述べねばなりません。

1）私は、閣下がみずからの権限を非常に広く確定するためにこの機会を喜こんで利用される時、私の請願書の、閣下自身に向けられた訴願、すなわち次の第二の所見に同意されるようお願いいたします。

そのことは、私個人にはほとんど関係がありません。というのは、私は、そうでなくとも、ほとんど十分に身を守って来ました。

2）全内閣に対して請願することが、閣下に不快なものとなる場合は、全く同様に私は、この訴願を静かに放棄して、それをただ後日に、閣下が先日私に申されたように、閣下が準備していられる新たな裁判所構成法④の資料として利用されることをご随意にお任せします。私はこの請願書に実質的関心をもはや持ちません。しかしベルヌト氏に対する私の訴願には益々増大する関心を持っています。（注、ここで1863年11月3日付けラサールの警視総監あての詳細をきわめた訴願状⑤が注目される。）私は内務大臣にこの訴願を理解させており、この訴願を吹き込まねばなりません。

電信についての方策⑥のために、どれだけお時間があるのかご決定をお待ちいたします。

敬 具 F. ラサール

追伸 閣下が、内閣へのこの請願によって司法大臣が検事に対し私の „Julian-Schulze“（注、この本については後述する。）を万一押収するかも知れないほどに刺激されると信ぜられる場合は、請願は全く手をふれないままにさせていただいたがましです。というのは、もう一度くり返しますが、この本の押収はどんなことがあっても行なわれてはなりませんから。」⑦

さらに司法大臣からラサールあての2月5日付けの冷淡な回答と日を同じくして、1864年2月5日付けラサールのビスマルクあて書簡は、ラサールの近々出版される書物に対するラサール自身の並々ならぬ期待を首相あてに表明すると同時に、警察や検事局によるその押収を絶対

に阻止するよう訴願している。この書簡のなかには、ラサールがデュッセルドルフの予審判事の拘引状について一言もふれていない点が注目される。そのことは、ラサールが拘引状の件を決して気にしていなかったことを意味するのではなく、むしろ、ドイツ・デンマーク戦争がすでに勃発しているこの時点で、彼が労働運動の新たな展開のために、この新書の影響力に対していかに大きな希望をつないでいたか、そしてそのためにビスマルクをいかに誘い込みその権力をいかに利用しようと期待していたかを、手にとるように明示している。この2月5日付けビスマルクあてラサール書簡（オリジナル）の全文は次のごとくである。

「閣下！あるきわめて重要なもの、そして今回はきわめて容易に解決できるものですから私は、お時間が今いかに繁多であられようとも、閣下のお時間をちょっといただかねばなりません！

目下のところ8日ないし10日以内に私の著作が現われます。——「致命的な矢」、私は4か月前から日夜鋭意それに携さりました。すなわちこの著述は、„Herr Bastiat-Schulze von Delitzsch, der ökonomische Julian, oder Kapital und Arbeit“^⑧です。

仮りに閣下から著者の虚栄心を疑がわれるとすれば、それは私にとって不快なことです！しかし私はそれにも拘らず閣下に対し、この著作は進歩党および自由主義的なブルジョワジー全体の最も徹底的な殲滅を招来するであろうと言わねばなりません。——というのは、私はこの著作において、単に模範と見なされているシュルツェ氏の人格にではなく、進歩党と自由主義的なブルジョワジー全体とにかかわり合っているからです。この著作は労働者階級のなかに熱狂的に影響を与え、単に同階級のなかにおける知的なすべての者のみならず、国民のなかにおけるやはり知的なすべての者を進歩党に対抗して結集させるであります。

この著作は一言でいうと、まさしく普通選挙権の先駆者としてぜひとも必要な著作であります。

同時に私は、この本そのものが生み出すと思われる評判と普及とは別として、簡単な布告によってドイツの全労働者集会におけるこの本の朗読を指令できる立場に在ります。

それゆえ唯、当地の検事局がふたたび、私のライン演説や „Ansprache an die Arbeiter Berlins“（注、1863年10月14日の呼びかけ）の場合のように、この本のなかに国民等々に向けて憎悪と軽蔑とを扇動するのを認めて、押収を誘発しないかが問題であります。実際に押収の理由は少しも存在せず、この本は徹底的に科学的著述であり、私は我々の敵手を粉碎するために、科学の最も重い岩塊を転がし入れました。

しかし殊に当地の中央局の講師フリートレンダー（Friedländer）氏は熱情的な進歩党員だから、神とプロイセン検事局の傍らでは何一つ不可能なものはありません。

今ここで司法大臣は最も容易なまた最も簡単な方法で保護を加えることができます。迫害される者は、もっぱら検事次第であり、検事は司法大臣次第であります。それゆえ司法大臣はベルリンの検事に対し前もって、この本に対して決して干渉が行なわれないよう厳命すべきであ

ります。訴訟は私にとって全くどうでもよいことですが、この本の押収は、——閣下はこの本を後日みずから入手されるでしょう。——決して取り返しのつかない不幸であります。

司法大臣は検事に対し前以て訓令すべきであります。というのは、押収がまず行なわれ、これが裁判所へ持ち込まれると、この押収はもはや検事局と大臣との手中にはないのです！ それゆえ私は時機を逸せず申述べているのです。

私はこの本が刊行されるベルリンの検事に対する安全保証のみを必要としています。というのは、私は、先日私のケーニヒスベルク訴訟の機会に、この著作が発行されない場所の刑事裁判所は、権限をもたないという見解を貫徹しました。

それゆえ司法大臣と会談なさることをお願いします。司法大臣に対しては服従を拒むことはできません。というのは、最終審では、この本が迫害されるべきかいなかは、もっぱら政治的問題であります。

私はこの本を閣下のお手許に届けることのできる瞬間を楽しみにしています！

私はこの著作の発行に際し、ブラス（Brass）氏に対し、そのあとがき（Nachwort）„Eine melancholische Meditation“^⑨並びに、その別の概要を同氏の新聞に印刷するよう懇請するつもりです。^⑩

序でながら私は——完全な秘密の厳守をお願いしつつ、——閣下に対しシュライニッツ（Schleinitz）宮内大臣^⑪の陰謀を警告せねばなりません！それ以上は口頭で！

民衆の間における私の意見の増大は、ライン地方において最も大規模に、驚くほど高まっています！しかし、閣下の部下が私をいかに悩ましているかということも、同様に驚くほどであります！ベルリンでは警察が協会の家主を非常に嚇すので、家主は契約しているにも拘らず場所を断ります！バルメンやロンズドルフなどでは警察は私の代表者を刑事裁判所へ引きづって行きます。警察と検事は労働者階級について可能ないっさいのことを為し、労働者階級は、政府に対し強いて嘆願する意欲を少しも持ちません！——電信法（Telegraphengesetz）は閣下のひまができ次第閣下との討議を待ちこがれています。敬 具 F. ラサール

追伸 ちょうど今私の許に、私は „Ansprache an die Arbeiter Berlins“ が原因で、国事犯の扇動、あるいは進歩党に対する憎悪と軽蔑との扇動のために告発が確定したという検事長の通告が届いています。

いま、私自身はこの告発に甘んじますが、閣下が迫害と押収とに対してこの新書に保護を加えて下さらなければ、私は断固として、立て銃^つの姿勢をとり、事態の欲するがままに成り行きに任せます。 上記の者」^⑫

さて、ラサールは以上の2月5日付けビスマルクあて書簡のなかで、近々新刊予定の „Bastiat-Schulze“ によって「進歩党および自由主義的なブルジョワジー全体の最も徹底的な殲滅」というビスマルクとの本来の同盟目的を果たす意図を言明している。そして同年5月11日付けライプツィヒからハッツフェルト伯爵夫人にあてた彼の手紙のなかで、「彼（ビスマ

ルク)は未だ悪魔と共にさくらんぼを喰らう男ではない!」⑬と語り、ビスマルクがドイツ・デンマーク戦争勃発を契機に勝ちほこり、社会問題においてもラサールに先んじようと企てるであろうと信ぜざるを得ないことを暗示しつつ5月に至ってもなお、„Bastiat-Schulze“の影響力を期待し、ビスマルクとの交渉に成功することを待ち通すべきを力説している。しかし上記の短い言葉は、しずかに熟考してみると、意味深長なものと推定され、ラサールの組織企図と関係している。すなわち「ラサールは前々からあらゆる労働運動が政策化され、それからラサールの手に落ちる」⑭ことを待ち望んでいたのである。

なおまた、ラサールは既述のごとく、この本のあとがき „Melancholische Meditation“を、この本が出版される前に、半官的な „Norddeutsche Allgemeine Zeitung“ のなかに掲載してもらい、「このことに依って、検事の干渉を困難にしようと配慮している。」⑮そのようにして、未だ印刷中のこの本の最初の5折帳^{おりちよう}(Bogen. 折りたたんだ1枚の印刷紙。書物の16ページ分。)が、2月9日ティーテルマン参事官あてに送られ、「ビスマルクに良い感じを与えることによって検事の職務への異例の干渉を正当化しようと試みた」⑯のである。

さて、ラサールのデュッセルドルフへの拘引状問題は、2月7日の時点に至ってもなお少なくともラサールにとっては未だ解決されたと見なされていない。1864年2月7日付けベルリン、ポツダム街13番地のラサールからの全内閣 (Gesamtministerium) あてのかなり長い訴願状⑯は、この拘引を禁止してもらうために彼独得の法理論を展開している。その全文(オリジナル)⑰は余りにも長いので省略せざるを得ないが、ラサールがこの訴願状で求めているのは、ライン地方控訴院に対し拘引状の取消しを求めて訴えているので、控訴院がなんらかの決定を下すまでの間に内閣とくにビスマルクの権力によって拘引状の禁止を指令することであった。

さて、以上のごとき全内閣あての拘引禁止を求むる訴願状を出した翌々日1864年2月9日付けラサールの、先に触れたティーテルマン参事官あての書簡は、やがて刊行される彼の経済学的新書がベルリンの検事によって押収されないようビスマルクを通じての司法大臣の助力を求めている。ハッツフェルト伯爵夫人の「写し」⑱によると、この書簡文は次の通りである。

「拝啓 あなたの希望を快よく容れるために、私がちょうど今手に入れた初めの五つの見本刷り——まだ緒言が欠けています。——をお送りいたします。⑲14の折帳がすでにセットされているが、この五つが初めて印刷されました。この著作⑲は16折帳になりますが、近日中に同時に末尾までセットされ、他の折帳もすべて試し刷りされるでしょう。それゆえあなたは恐らく、他のほとんど総てを同時に入手されるでしょう。それであなたへの見本刷りの送達と書店の発行との間で約3日間だけが経過するでしょうから、あなたがこの初めの五つの折帳を同時に今あらかじめ読まれたら、いずれにせよ非常に有益であります。仮りにそれが有益でないとしても、新聞によって犯されている違反は政治的違反であり、またそれゆえにこの違反を告発するかしなはいは殊に政治的問題であり、仮りにそうでなければ政府の告発独占も決して意味を持たなくなります。あなたは、やはり確かにこの最初の五つの折帳から、この著作の純粋に科学

的な性格を十分に洞察されるであります。この著作の影響・意義および効果は、あなたにはもちろん読書の進行からして初めて明らかになるでしょう。というのは私は、効果を一層確実にするために、一步步と段階を踏んで着手しましたから。

しかし純粋に科学的な性格にも拘わらず、なにもものこの著作を、——というのは、警察官・検事および裁判官のすべて、またはほとんどすべては、しばしば自らは無意識のうちに、熱情的に進歩党員であり、またこの著作は、この本の成り行き (Verlauf) のなかで、進歩党の立脚地全体を根底から崩壊させ、進歩党の人々が依然として多くの国民諸階層の上に有している勢力を破砕するので、——どんな場合においても迫害に着手してはならないという、検事に対する司法大臣の積極的な命令がない時、私は重ねて申しますが、なにもものこの著作の押収に対して保全するものはないでしょう。ビスマルク氏は、二人が10月ライン演説の押収について話し合った際、私の書き物——というのは、それは当然民衆の評判になるでしょう。——は、世間に害を及ぼすことがあり得ると私が思わないならば、王国の検事たちにあてて、私の書き物を迫害しないままでおくようにと命ずる回状さえ出そうと私に提案されました。私はこれをお断りしました。そして私は今もただ当地の検事あての口頭による厳命を要望しているだけです。そしてこのことに対して、司法大臣殿は、ビスマルク氏によって私に提案された回状に対してよりも一層はるかに容易にご理解いただけます。

それゆえ私は、このたび当地の検事に対する司法大臣の、私によって切望されている積極的の命令、を主張せねばならないことをくり返します。さらに、この本の成り行き全体はあなたに対し、ビスマルク氏が同氏のがわで、この際、私の党派が獲得するのと全く同じだけ多くを獲得されるということを明示するでしょう。 敬 具 ② 」②

しかし、以上のようなラサールの自己の著述に対する並々な自信と期待とも拘らず、殊にラサールのこの願望をかなえてやることによって、ビスマルクも ADAV が獲得するのと同じような非常に多くのものを獲得することを敢えて指摘したにも拘らず、その点でラサールは、重大な戦争中に外交的情勢がビスマルクのこの上ない注目を要求している時機において、首相兼外相がマンチェスター派とシュルツェ・デリチュとに対するラサールの経済論争を研究しまたは単にこの論争のページをとびとびにめくるにしても、そのために時間を使うであろうということを見積ったという意味において、ビスマルクのいわば人柄の構造、さらに政治的情勢のなかに生じて来た決定的な転回を言うまでもなく誤認したのである。

現実政治家ビスマルク、軍事的経済的諸力と諸結合とを冷静に打算考量するこの人物は、新書についてのラサールの誇示と願望とに当面して、おそらく、ラサールの著述による遠大な待望とは異なった、情勢のもたらす一層信頼できる成果に期待を寄せ、そして、自分の著述に満足しきっているラサールがビスマルクあての手紙で、この著述のなかに „die gründlichste Vernichtung der Fortschrittspartei und des ganzen liberalen Bürgertums“ ② が含まれていると保証した時、推察するにビスマルクは独特の微笑を浮かべたにちがいがなかった。そ

してさらに、ラサールが彼に対し比較的浩瀚なこの著作を、まさしく「普通選挙権の先駆者として是非とも必要な」⑤著述として称揚した時、ビスマルクは、この普通選挙権の方策のためにつかもうと決心できる道を他の遣り方で思い浮かべたことも容易に推察されるところである。ヘーゲル哲学の後継者の一人としてのラサールは、この時代の少数のドイツ人思想家たちと同様に、Macht の本質に深く通じていた。それにも拘らず、思うに学究の徒としてのラサールもまた、政治生活における精神の活動領域について、書物に由来し得る Macht を一層懐疑的に判断している現実政策的権力者ビスマルクよりも、言わば一層広い境界を画していたと評することができるのである。

果たして、1864年2月5日付けラサールのビスマルクあて書簡および、2月9日付けラサールのツィーテルマン参事官あての五つの見本刷りおよび書簡、さらに日ならずして送達されたと断定される新著 „Bastiat-Schulze“ に対し、2月20日付けロバート・フォン・コイデル（注、回想録の著者）からの、ビスマルクの命に基づく返書（オリジナル）は、次のごとく、ラサールにとってきわめて期待はずれの、非礼とさえ感じられる簡単なものであった。

「ベルリン、1864年2月20日

ヴィルヘルムシュトラッセ 74

首相殿は、貴下の最近の著作の送達に対し貴下にお礼を述べるよう、同時に、首相殿は残念ながら近日個人的に貴下に応接する立場になく、否応なしの用務に平生よりも多く追われているので、なんら定まった日時を決めることも出来ない旨伝えるよう依頼を受けました。

敬 具 参事官コイデル」⑥

以上のごとく、ビスマルクの命で、著者たるラサールの著述を拝受した旨確認し、ラサールに対し、彼の請願した会談のためには日時を決めることは出来ないと伝えたコイデル参事官の返書の表現様式は、ラサールに対し、ビスマルクはこの時点でラサールとの会談を継続するなんらの必要を感じてはいないという的確な証拠を提出したということに外ならなかった。ラサールがそのような事情の下で、情勢がそうであったから時宜を得ていなかった会談を強要するために、また首相が請い求めなかった助言をビスマルクに与えるために、なんらそれ以上の処置を執らなかったと仮定したら、おそらくラサールは一層賢明にふろまったと言えるであろう。それにも拘らず筆者らは、ラサールが彼の生涯の最後の年、すなわち1864年には待機し安居するだけの気力を事実上もはや持っていないことを認識せざるを得ないのである。ラサールが、ビスマルクにあてた2月20日以後のものと断定されている日付けなしの、後述する手紙（Originalkonzept）の末尾に、「閣下のイニシアティブを待ち通していた。」⑦と弁解しているこの言葉そのものが却って、一層彼の焦慮を裏書きしている。

シュロモ・ナアマンがその大著 „Lassalle“ の序文において、ラサールを革命の世紀の生みの子として次のごとく断定している時、ナアマンもまた筆者らの認識を暗示的に肯定しているものと推論するのである。

「ラサールは二つの革命（注、七月革命および二月革命をさす。）を単純に経験したのではなかった。彼は革命的な世紀の生みの子であり、この世紀に生を享け、この世紀の空気を呼吸した。もしくはより正確にはラサールは、ヨーロッパ人のある階層が、非革命的な年々を来たるべき革命のなかでのみ耐え忍び、己れの階層の意識のために、革命でなかったいっさいを排除することによって、永続的革命として体験した世紀の生みの子であった。革命の世紀は大革命の第一次パリ・コンミュン^⑧と共に初まり、1871年の第二次パリ・コンミュンと共に終わった。すなわちラサールは全くこの世紀の生みの子であった。彼はこの世紀のなかで彼の概念を構成し、この世紀のなかでヘーゲル弁証法のかたわらに正道を見出すことを学んだ。革命の力学はラサールの歴史的予測を決定し、来たるべき第二のコンミュンは、彼にとって思惟的必然性であった。彼がこのコンミュンをもはや体験しなかった時、それはただ、生長して拳銃弾とならなかった精神が肉体に宿っていたからである。（Wenn er sie — die kommende zweite Kommune — nicht mehr erlebte, so nur, weil der Geist in einem Körper haust, der einer Pistolenkugel nicht gewachsen ist.）」^⑨

このように今や待機し安居する気力をもっていない革命家ラサールは、折返しもうひとたびビスマルクあてに手紙を書いた。ベルリンで書かれた日付けなしの、しかしとにかく2月20日以後のものであるオリジナルの草稿は、次のごとくである。

「閣下！ 口頭による会談の時間がないので、会談の対象 (Gegenstand) ^⑩ を成していたはずの二つの要点を指摘することは、少なくとも有益でありましょう。

外交政策が目下圧倒的な重要性を持っているということは、当然であります。閣下が外見上のごとく、目下オーストリアとの同盟のプログラムに固執してられる時、実際そのような最高に健全な国民的な (national) ^⑪ 同盟は全くありそうなことです。この同盟の基礎となっている土台 (Basen) ^⑫ が私にとっては問題です。

さらに、極度に世界史的であり国民的であるオーストリアとの同盟は、ありそうなことです。しかし現在オーストリアに勧めて同盟の決心をさせることは、未だ全く考えられないことであり、従って、この同盟は恐らくいつかは未来の必須的なプログラムとなるにしても、この同盟について語ることは、全く無駄であります (ist). ^⑬

しかし、確かに今可能であり、上述の同盟の偉大さを有することなくして依然として (immer noch immer) ^⑭ すばらしく国民的な、オーストリアとの別種の同盟もまたありそうなことであります。殊にナポレオンと同じく、プロイセンに敵対的な政策をとる一つの同盟ができるとすれば、この同盟はドイツに対しナポレオンに対する完璧な優越を保証し、国民を熱狂させることでしょう。（Eine Allianz, welche, zumal sowie Napoleon eine uns feindliche Politik einschlägt, Deutschland die vollkommenste Überlegenheit gegen ihn sichern und die Nation hinreissen würde.）

しかし第三に、プロイセンに容易に、完全に反革命的な立場とナポレオンに有利な役割を与

えると思われるオーストリアとの同盟，プロイセンにとって最大の災厄をひき起し得る同盟！
それゆえすべては同盟の土台にかかっています。

最後の場合を避けること，第二の場合を招来すること，この二つの異なった同盟の土台についての閣下の意見を聞くこと，そして私の意見について閣下と意見交換を行なうことは，希望している会談の最も重要な目的であります。

お会いできた場合の第二の目的は，進歩党の再召集について広まっている噂はいかなる根拠を持っているのかをお尋ねすることでありました。再召集があるとしたら，それは，国民に対し，名状しがたい無能力の印象のみを与え，政府は堂々たる態度に対するいっさいの権利要求を断念せねばならないでしょう。

私(Ich)⑤は，それはそうとして，私に全く縁のない参事官の手から (von der Hand eines mir völlig fremden Regierungsrates)⑥返事を受取ったという私の不快な驚きを強調せざるを得ません。私の著書の送達は，個人的な (persönlich) ⑦もので，公的なものではありません。そして閣下がひまを持たないという通知は，閣下の遣り方次第では私に対し，二つの言葉で (durch zwei Worte)，または閣下が最初私の許に遣わされて以来閣下の助力機関 (aushelfendes Organ) ⑧として承認していたティーテルマン参事官によって届く (zukommen) ⑨ことができたのです。

私は，閣下にふたたび迷惑をかける以前に，閣下のイニシアティブを待ち通していたということはもちろんであります。⑩」⑪

以上の文面のなかでラサールが，重大な意味をもつと自負している新書とビスマルクあて書簡その他の送達に対する，縁のない一参事官の手による返書について挑戦的の不快を表明したことは，ラサールの対ビスマルク関係に決して好ましい影響を与えなかったことが容易に推察されるが，それはとにかくとして，さらに以上の文面のなかでラサールが，二重の懸念を表明したことが判る。すなわち，その懸念の一つは，ラサールにとって常に非常に嫌な反動の本山オーストリアとの同盟は，ラサールがこの同盟をどんな事情の下でも決して非難しない時，プロイセンを完全に反革命的水路に導くということ，次に他の一つの懸念は，政府はもういちど改めて進歩党を召集し，それによって政府の名状しがたい虚弱の印象をドイツ国民に与えることもあり得るということである。それは推察するに，普通選挙権の欽定についてなおひとたびビスマルクと討論を開こうとのラサールの最後の試みとなるべきものであった。それにも拘らずこの処置は依然として効果を収めなかった。⑫

「しかしながら続く時期においてラサール，ビスマルク間の口頭による交渉，つまり会談は文書的にはもはや立証され得ないにしても，二人の交渉は間接的にはなお継続していたと言うことができる。これ以後の数週間このアジテーターは，主として弁護演説の仕上げに忙がしかった。」⑬他面，既述のごとくドイツ・デンマーク戦争の勃発は，ラサールとの関係においてビスマルクにきわめて有利な立場を与えることとなった。「ドイツ・デンマーク戦争は，相戦う

闘争的な両派にとっての安全弁となった。他者にとって安全が存する処では危険がラサールを脅やかしているということを認識するのは困難ではなかった。ラサールはビスマルクの増大する安全性を感知した。」^{④④}

ラサールはこの危険をすでに1864年2月下旬見てとり、この危険を私信のなかではっきりと述べている。すなわち、2月21日ごろと断定されている友人の作曲家フォン・ビューローあて、「私の国事犯訴訟審理は3月12日と決められているが、これ以上無意味な訴訟は存在したことがない。それにも拘らず全くのばかげたことが常に最大の危険なのだ。」^{④⑤}と明言している。従って3月12日と予定されている法廷での彼の弁論を、整理するのに追われ、「社会的王国」(soziales Königtum)の草案をこの苦境からの救済であると考えた。こうしてこの新草案の最初の公開のまた明白な発表は、1864年3月12日、国事犯のために3か年の懲役がラサールを脅やかしていた時ベルリンの国事裁判所法廷において彼が行なった弁護演説(Verteidigungsrede)となったのである。^{④⑥}

彼が告訴された理由は、1863年10月14日A D A Vの名でベルリンで配布された例の„An die Arbeiter Berlins“と題する呼びかけの小冊子と、そのなかに含まれているライン演説についてのランゲ(Friedrich Albert Lange, 1828-1875, 哲学者, 経済学者, 社会民主主義的ジャーナリスト)の報告の複写とであった。この弁護演説でラサールは大成功裡に身を守った。「裁判官たちは弁護演説ののち会議室に戻り、約一時間経ってふたたび現われた。裁判長は、被告のベルリン労働者むけの呼びかけの内容はきわめて奇異ではあっても、被告は、国事犯の告訴については無罪であらねばならぬ、というのはなんらの牽連(Konnexität)も存在しないからである、との判決を下した。」^{④⑦}さらにラサールがこの法廷演説を普通選挙の実施という「彼の目標にいかに関与させたか、また彼が彼の生存のための闘争においてビスマルクとの過去の会談を武器としていかに関与させたかは、周ねく人の知るところである。」^{④⑧}彼は当時(日付け不明)モーゼス・ヘスあての手紙のなかで、次のように述べている。「……………私は憲法を転覆させようと思うのみならず、おそらく一年経たないうちに憲法を転覆させてしまっている。……………恐らくもう一年経たないうちに、世界中で最も平和的な様式で普通直接選挙権が欽定される。……………」^{④⑨}さらにまたラサールはこの弁論のなかで、王国とブルジョワジーとの間で燃え上っている闘争を「出口のない闘争」(Kampf ohne Ausweg)^{⑤①}と呼び、「国民自身を舞台に登場させその権利を打ち建てよう」^{⑤②}と提案し、この出口なき闘争において唯一の可能な出口を開いてやるのだと誇っている。ラサールは、政府が遅すぎない限りにおいて、卓越せる洞察力をもって、国民に無限の膨張力を与えるために普通直接選挙権を付与しない時、このことを国民にとっての一つの危険として言い現わしている。ラサールはこれに先立ち、この小論冒頭において紹介した拙稿のなかで示したごとく、1月末(または2月初め)の日付けなしのビスマルクあて書簡のなかで、これと同じ意味のことを書いている。そのようにしてラサールは実際今や3月12日の弁護演説において、王位に対し殊に王位の第一の助言者ビスマルクに切

願し、一方彼は同時にビスマルクに対し、ラサールの聴き手と読者とがそれに気付く必要なくして、二人が先頃行なった会談が基づいている土台を思い出させた。ラサールはこの弁論のなかで、公然と、プロイセンにまさしく存続しているとき、大衆と自然のままの国民的王国（Volkskönigtum）との同盟を信ずることを告白した。そしてラサールによると、この王国はなんらブルジョワジーの恵みの王国ではなかった。しかし彼はまた、この君主国が「真に偉大な国民的、国民に適合した目標」^{⑤9}を追求しようと決心する時にだけ、その同盟は実現し得るということをはっきりと洞察させた。ラサールは次のように叫んだ。「堅忍不拔の精神をもって『権利』に向って押し進む時王国は、排他的な徒党に譲歩して一握りの人々によってその好意から、王国が絞殺される首ひもを巻いてもらうよりもむしろ、真の権利に復帰して国民を舞台に導く立場に在ることを思い出すのだ。」^{⑥0}この弁論演説に先立って3月6日、賢明なブーハーはラサールを促してこのような立場を緩和させていた^{⑥1}にも拘らず、この被告ラサールは、一年以内にプロイセン国王と国王の政府が普通直接選挙権を欽定する場合は、「ブーハーをこの憲法転覆の精神的共犯者として、また知的張本人として」^{⑥2}告訴することを彼の裁判官に任せた。実にこの弁論演説は、„soziales Königtum“なる標語のためのアジテーションの頂点を示すものである。すなわち、「この標語は、ラサールのアジテーションの最後の段階、彼のアジテーションの最後の謎、古典的社会民主党における彼への尊敬にとっていわば『つまずきの石』（Stein des Anstosses、注、ロマ書14の13）である。その代り我々は、古典的社会民主党に対し非同情的な労働者扇動家たちに向って同情を呼びさまそうとする、多くの階層における激しい努力についてもまた、この標語のおかげを蒙っているのである。」^{⑥3}

ラサールは社会的王国に対する彼の自称する個人的関係をすでに2月24日付けフーバー（Huber, Victor Aimé, 1800-1869、急進主義者、のち保守的君主主義的社会政策家）あての手紙のなかで、フーバーに著書 „Bastiat-Schulze“ を渡すと同時に、次のごとく語っている。

「言われているように、私は幼時から共和主義者です。そしてそれにも拘らず、また恐らくまさにそのことに依って私は、仮りに王国がたった今、社会的王国と成る決心をするならば、王国以上に偉大な未来と多幸な役割とを持ちうるものは何一つないという確信へ到達しています。仮りにそうならば私は情熱をささげて王国の旗を支持するでしょう。」^{⑥4}ラサールのこの言葉がフーバーの不信を払いのけたとは到底考えられないが、ラサール自身ももちろん本気でこう言ったわけではない。「ラサールは、共和主義者であったのと全く同様に幼時から絶対的な無神論者であった。彼は社会的王国の旗を社会的キリスト教の旗と同じく、単に篡奪者や扇動政治家として利用できただけであった。」^{⑥5}

既述の3月12日の弁論演説もラサールにとっては、社会的王国の実現と相即不離の関係にある普通直接選挙権を実現するためのアジテーション的策略以外の何物でもなかった。労働者階級の自由のために戦っている、いわば古代共和政時代の護民官ともいふべきラサールが、1月

末（または2月初め）以来杜絶しているビスマルクとの会談を裁判所の法廷において継続しようとの大胆不敵さをふくんでいるこの驚くべき演説のなかで、ラサールは、おそらく一般に未だその十分な意義を評価されていないと思われる告白を行なった。すなわちラサールは法廷で、信頼に価いすると考えられる次のごとき告白をしている。——自分は、労働運動を開始した時、二様に見通していた。一つは、政府には決して、普通直接選挙権を付与する以外に道は残されていないであろうということ、次に、大きな対外戦争がさし迫り、この戦争は政府に対し国民を無視することを不可能にし、またこの戦争は、政府が行なうものを「国民に支えられ、国民に担われて」(gestützt auf das Volk und getragen vom Volke) ㉞ 為すよう強制するであろうということ。——

ラサールはまた法廷で、すでに彼の綱領すなわち、1863年3月1日の「公開答弁書」の布告に際して、プロイセン政府は、欲すると否とに拘らず、おのずから、ラサールとの協定において、またはかかる協定なくして、ラサールが新たな党を創立しその指導者となるに当って携えた行動綱領の最も重要な部分を実施するよう強制されるであろうということを意識していたと、次のように告白している。

「諸君、巧みな競技が演ぜられ得るのです。卓上のカード！ それは、その評価をなんらの秘密をもっても包む必要のないまたとない強力な外交であります。というのは、この外交は堅い必然性に基礎づけられているからです。

私はだから諸君にこの晴れの場所でおそらくもう一年間とはすぎないでしょう。——そしてビスマルク氏はロバート・ピール (Robert Peel) の役割を演じて、普通直接選挙権は付与されるのです！ 私はこのことをすでに、私が私の公開答弁書の布告によってこのアジテーションを始めた最初の日に知っており、炯眼をもって情勢を捉えた人ならば誰でも気付かないということはありませんでした。

私は言います。国家行政はロバート・ピール卿の役割を演ずるでしょう。しかもすでに国家行政にとって他に決して何も残っていないからという極めて単純な理由からです。」㉞

思うに、ラサールは確かに、ビスマルクが彼に対し、また彼によって生まれた現在および近き未来のための運動に対して与えた意義を過大に評価したのである。「ラサールは、首相がアケロン河 (der Acheron, 注、ギリシア神話における、悲しみの河——地獄の河の名) を活動させざるを得ない (注、首相がその意志に反して普通直接選挙権を付与せざるを得ない) ということに殆んど疑いをはさまなかった。」㉞それはとにかく、ラサールが1864年3月12日法廷で布告した「社会的王政 (soziale Monarchie) の理論が履行しがたいものであり、混乱した印象を与えるとしても、この理論の実践的態度は徹底的に論理的であり、ことに幻想を持たなかった。ラサールは公然と、社会的な行政政策の不足と矛盾とがやがて情勢を解明するであろうという唯一つのことを頼りとしていたのである。」㉞

さて、この法廷弁論に対するかなり危惧のない但し書とも言うべきものは、この最初の異常

と思われる演説ののち12日経ってからモーゼス・ヘス（A D A Vのケルンにおける代表者）にあてて書いた3月24日付けのラサールの手紙である。この手紙のきっかけは、ラサールがそのフランス語訳の完成を待ち望んだ „Bastiat-Schulze“ である。ラサールはこの手紙のなかで、ドイツ・デンマーク戦争が彼の問題に大きな影をおとしたということを骨身にしみて感じつつ、彼の当時の立場をいわば自慰的に次のごとくしている。

「政府に関しては、あなたは、私の国事犯弁論のなかで最近まで政府がどのように私に媚を呈したかが（部分的に）述べられているのを知ってられる。この媚態は、依然としてなんら逆転してはいないが、最近一層曇ったものとなりました。

進歩党の政府に対する攻撃は沈黙させられており、一方政府はシュレスヴィヒ・ホルシュタインにおけるその成果を非常に誇っています。私は確かな筋から、政府がすでに将来この方法であっても実験するために、普通直接選挙権を承認しようと決心していることを知っています。他方では政府は6週間前（すなわち、2月10日頃）から、この選挙権は必要でない、進歩党を冬ふたび召集できると考えています。戦争がさらに進む、つまりフランスとの戦争にまで発展するとすれば、もちろんこの損害はなお一層はるかに利益に変ずるでしょう。しかしさし当り事態は以上の通りです。」^⑤

こうしてラサールは、政府の態度に対する言い知れない失望と対フランス戦争という万一の場合に対する希望との入り混った手紙を書き送っている。

しかし事態は、ラサールのこの希望的観測を許すがごときなまやさしいものではなかった。対外戦争の勃発は実に、ラサールの対ビスマルク交渉における破局的転回点を意味していた。確かにビスマルクは、すでにシュレスヴィヒ・ホルシュタイン問題の危機が決定的段階に入るや否や、ドイツ民族精神の高まりを利用し、対外的成果によって国内的困難を晚かれ早かれ克服する可能性を真剣に考えることができた。「ビスマルクが国王の意見を変えさせることに成功すると仮定した時でさえ、普通選挙権の欽定は、非常に危険な企てであったので、ビスマルクがすでに、ラサールに察知されていたように実際にこの考えに習熟していたにしても、この冒険を余計なものとする他の通路が彼の前に現われた時、これを断念したのである。」^⑥

既述のモーゼス・ヘスあてラサール書簡から一か月半ののち、ラサールは「1864年5月8日、夏の旅行に出かけたが、彼はこの旅行からふたたびベルリンへ帰ることはなかった。……。冬の間途方もない無理を重ねたため、彼の健康は完全にそこなわれていた。」^⑦友人の作曲家ハンス・フォン・ビューローにあてて、すでに2月（21日ごろ）には次のように書いている。「私は死ぬほど過労しており、私の医者は、私が神経性熱病にかかるだろうと賭けをしています。しかし私は医者が見そこなって、私が賭けに勝つことを望んでいます。」^⑧また同じく2月（日付けなし）ラサールはロートベルトゥスあての手紙のなかで、「私は仕事で無理を重ね、神経を使いすぎたため、すっかり参ってしまいました。からだ中の神経がぶるぶる震える紐みたいになって私を苦しめるのです！」^⑨と訴えている。

事実、「ラサールの命数は尽きていた。前の年のアジテーション演説の折にもひどかった首の痛みのため、デュッセルドルフの主治医の診断によれば、彼はもうあといくらかも生きることが出来なかった。

それにも拘らず、まだ一抹の希望がある限り、彼は後退しようとはしなかった。あいかわらず彼は政府から普通選挙権を克ち取れると考えていたが、この考えは、彼が生涯の最後の数か月間に考え、また語っていることがらの中心になっている。……。彼は5月に彼の部隊を新たに閲兵することとした。閲兵はライプツィヒで始まり、そのあと各地に、どこよりも再度ラインの諸支部に及んだのち、1864年5月22日、ロンズドルフ (Ronsdorf)®で開かれた協会創立記念祭でクライマックスを迎えた。一般にこの時のラサールの演説はロンズドルフの名をとって „Ronsdorfer Rede“ と呼ばれているが、これはラサールがそれより先——おそらくは大抵レジュメのかたちで——5月9日ライプツィヒで、14日ゾーリンゲンで、15日バルメンで、18日ヴェルメルスキルヘン (Wermelskirchen, ロンスドルフ近くの小都市) で行なった演説と同じものであり、到るところでそれは労働者大衆の喝采をもって迎えられ、勝利の喜びに、肉体の限りない苦しみを忘れさせた。」®

それゆえラサールは5月11日付けライプツィヒからハッツフェルト伯爵夫人にあてた手紙のなかで、「ビスマルクがこの暖炉のなかで掻き廻わせば掻き廻すほど、彼は益々私の運動を育成するのです。」®と誇り、さらに、5月20日付け同じく伯爵夫人あての手紙のなかでも次のような喜びと期待とにみちた言葉を吐いている。「私は目下肉体的には思わしくありません。これに反して精神的には当地方のあちこちで、最近の日曜日と月曜日に、殊に昨日ヴェルメルスキルヘンでいくたびとなく強烈な印象を受けました。そのようにして私は曾て見たことのなかったものを！ 図らずもフェウストのシーンが心に思い浮かばねばなりませんでした！ フェウストのシーンでは第2部の終幕において、第1部（「満足し大きくまた小さく歓声をあげ、私はここで人間であり、ここで人間であることを許される。」）におけると同様に、フェウストは満足し静かに立っています。ここではもはや党の祝祭について、または党の集会について論議はありません。全住民は一つの名状しがたい歓喜の叫びをあげています。私は、（驚嘆の念を顔色や言葉で示すことはしませんでした）このアジテーションがまさしく、そのように力強く地方民団体の心を捉えることができたという或種の驚嘆から決して免れ得ませんでした。私は断固として、新宗教の創立においてもかくやあらんとの感銘を得ました。協会協団体ヴェルメルスキルヘンと国家協団体ヴェルメルスキルヘンとは、ほとんど全く隠蔽された名称であります。（ロンズドルフも全く同様に）。実際ひとたび普通直接選挙が行なわれると、ヴェルメルスキルヘン、ロンズドルフ、ゾーリンゲンのような地方民団体においては過半数についてではなく、単に一致について論議が残るのみです。住民は、私がかれらにその特徴を表示している各人に対して投票するために、人選をやるでしょう。」®

それにも拘らず、「ロンズドルフ演説は、一般にはラサールの行なった演説のなかで最も力

のないものとされている。その無力さは、おそらくそれが一気にできたものでないことからも来ているようだ。本来それは、前年の閱兵演説が『外向けの評論』(„Revue nach aussen“)であったのに対し、『内向けの評論』(„Revue nach innen“)になるはずであった。この演説は会員たちの間にほんとうの意欲と精神を呼びさまし、続いて政治的状况を力強く叙述することになっていた。ところがその後、ラサールが(ベルリンから)旅行に出発するその同じ日(5月8日)に、シュレーゲンの織工代表が国王に謁見するという事件が起った。^②そのためこの事件を契機にラサールは戦術転換をしたらしい。^③そこで演説はその構想を改め、『全ドイツ労働者協会のアジテーションとプロイセン国王の約束』^④という実際の標題が示すように、『外向けの評論』になった。労働者の頭ごしに、ラサールは、すでに前年の閱兵演説ではたらきかけようとした相手である『ベルリンにおける二、三の人々』(„ein paar Leute in Berlin“)に語りかけようとしたのである。^⑤

さて、既述のことがらから判断できるように、「ラサールは1864年春ビスマルクが政治的イニシアティブを保持するのを阻止できなかったので、社会問題においてイニシアティブを取られないよう固く決心していた。それゆえ、織工代表団に対するビスマルクの関心^⑥はラサールにとって極めてうさん臭いものであり、ラサールおよび彼の友人らにとって当然、ビスマルクがまさしく、社会的実験を試みる時、ビスマルクはラサール自身に危険となり得ると思われた。我々がロンスドルフ演説(注、5月14日—23日)を十分に吟味する時、国王への訴へのなかでビスマルクに対抗して国王による支持が求められたということが証明される。^⑦ビスマルクに対するラサールの関係が絶えず上り坂にあったと観る先入見は、ここでもまた史料の正当な理解を妨げた。ラサールの政治的社会的戦術が彼の信奉者たちによってもまた正当に理解されなかったということは、ラサールにより極めてしばしば賞賛された規律と忠誠との裏面である。」^⑧

以上のメーリングおよびナアマンの叙述に暗示されているように、ラサールの戦術の切札が強くなればなるほど、その根本的欠陥も明らかになって来た。ラサールは、国王が織工たちをていよく追い払うためにつくった間に合わせの慰撫的な言葉を、王につきつけ、のっぴきならないようにしようとした。ラサールはロンスドルフ演説のなかで、「国王がこの約束を守るかどうか、国王が労働者に与えたこの言葉が履行されるかどうか我々は見てやろう。」^⑨と公言している。しかしメーリングは当然次のようにラサールを痛烈に批判している。この「ロンスドルフ演説をまちがいなくビスマルクに送るようにラサールは協会の書記に厳命しているが、この演説が海千山千の外交家をまんまと瞞せるなどと、どうしてラサールは期待することができたのか!」^⑩ナアマンもこれと関連して次のように論じている。「ロンスドルフ演説は、好意的な批評家によって、蝕ばまれた肉体に宿る精神力の遺品の印しであると宣言されているにも拘らず、傑作と思われる。いわゆる織工に与えられた国王の口約束は、最初危機的な少時の間協会を指導したが、その後革命的アジテーションのなかでは食言であるとの烙印を押されている。」^⑪

さて、5月末以後のラサールの活動について、メーリングは次のように論述している。「ラ

サルは5月の終りから6月の初めにかけてバート・エムス (Bad Ems, 注, コブレンツの東約10キロ)に滞在し、首の疾患を治療しようとした。ここで彼は、„Kreuzzeitung“ が „Bastiat-Schulze“ について (ビスマルク派のジャーナリスト) ヴァーゲナーに書かせた批判、に対する反論^④を書いた。ヴァーゲナーは、ビスマルクとはちがって、ラサルが『君主主義的な精神』^③を持っていると考えるようなことはなかった。ヴァーゲナーは、具体的なプロイセン国家がラサールの抽象的な国家理念とはまるで関係がないことを、よく見抜いていた。しかし、„Bastiat-Schulze“ が示しているような科学的社会主義の必然的な発展に対しては、ヴァーゲナーはとまどうばかりであった。……。ラサールの反論の内容が示しているように、ラサルはここで普通選挙法の制定をもう一度提起した。^④……。ラサルは、(シュルツェ・デリチュ式の)生産組合のくだらない実験には強く反対し、大衆ほど組織能力をもつものではなく、かれらの健全な理性ほど知的なものはない、と述べて普通選挙法の根拠を示した。これは確かに正しい物の考え方ではあったが、ただ説得する相手を尻込みさせずにはおかぬ。なぜなら、ビスマルクやヴァーゲナーがどの程度の『賢者』(注、曾てラサルはこの二人と自分とをプロイセンにおける三人の賢者だと語ったことがある。)だったにせよ、支配階級の抜け目のない代表者だったかれらは、大衆の知性や大衆の組織をペストのように恐れていたからだ。

6月の末にラサルはデュッセルドルフへ出かけた。前年の閱兵演説で告訴されていたので、これに対し控訴審でみずから弁論を行なうためであった。この弁論は、政治的領域での問題を追求する限りでは、ロンスドルフ演説と大差はない。ついでラサルは、フランクフルトとファルツに1、2週間滞在し、主として定期刊行の協会新聞を準備するための仕事をした。(注、暫定機関誌 „Nordstern“ は益々お粗末になっていた。)……。7月中旬にラサルは、療養のためにスイスのリーギ・カルトバート (Rigi-Kaltbad, 注、チューリヒ市の南約40キロ、Zuger See 付近の保養地)へ移住した。ここでも彼は、何をおいても協会の仕事のために相変らず力一ぱい働かなければならなかった。当時『現状に圧力を』^⑤かけたいという衝動に駆られたラサルは、そのため秋にハンブルクの労働者に決議を行なわせることを考えた。^⑥この決議によってビスマルクに、シュレスヴィヒ・ホルシュタインをオーストリアの意志に反して併合するよう、要求するというのである。ドイツ・デンマーク戦争はすでに終わっていた。……。7月20日デンマーク政府は和平交渉に応ずると声明した。すぐれた予言者だったラサルは、オーストリアとプロイセンがこの共同の獲物をめぐっていがみ合いをするようになる、と先を読んでいたし、また、この対外的なもつれからビスマルクが普通選挙法という切り札を出さざるを得ない、と窺っていた。しかし、……。ラサルが戦術転換によってとるようになった幾多のあやまった処置のなかでも、ハンブルクの労働者に提案しようと考えたこの決議は、格段にあやまった処置だったと考えられる。これは決して『現状に圧力を』かけることにはならず、労働運動をプロイセンの占領政策の手中にゆだねてしまうだけだったであろう。^⑦

以上のごとき1864年5月末からのラサールの言動についてのメーリングの叙述の末尾におけ

るラサール批判については、筆者がよく調べてみると、メーリングが伯爵夫人あての7月27日付けおよび28日付けのラサールの手紙の内容を転倒していることが判り、この転倒に基づいて批判している点から観ても、結果論的に述べたやや不当な批判だとの感じがしないでもない。「現状に圧力を」かけたいとのラサールの考えは、いずれにせよ当時過労と病気とのため神経過敏となっていたラサールの感情の発露のひとつと観らるべきものである。当時リーギ・カルトバートに在ってラサールを悩ましていたものは、むしろA D A Vの書記ファールタイヒ(Vahlteich)との、代議員の票決権についての意見の衝突であった。㉔ ラサールは7月27日付けの全幹部会員あての長い回状で、ラサールかファールタイヒか、という信任問題をもちだしたが、これはむしろ、ラサールの当時の肉体的病患と精神的興奮との所産であり、しかもラサールの協会のための最後の活動となった。

ヘレーネ・フォン・デニゲス(Helene von Dönniges)嬢㉕は、その前日すなわち7月26日リーギ・カルトバートにやって来ていた。メーリングはラサールとヘレーネとの私的事件の急転回について、ラサールの責任を余り問うことなく、むしろラサールを弁護している㉖が、近代労働運動史の草創期におけるマルクス、エンゲルスと並ぶ巨星の運命はすでに尽きようとしていた。ラサールは8月27日遺言書を書き、翌日、ヘレーネの婚約者「年若い肺結核の学生」㉗ルーマニア人貴族ヤンコ・フォン・ラコヴィツァ(Janko von Racowitza, 1865年病死)とジュネーヴ付近の「カロウゲの森」(Gehölz von Carrouge)で、ピストルによる決闘を行ない、1864年8月31日39才の壮年をもってレマン湖畔で突如として世を去った。

以上本稿において論述し来たったことを顧みると、ドイツ・デンマーク戦争の勃発は、ラサールの期待とは逆にビスマルクの立場にきわめて有利に作用し、ビスマルクは今や危険を冒してまで普通直接選挙権を導入するために、ラサールと交渉する必要を認めなくなり、結局ラサールは対ビスマルク交渉に失敗したのである。そしてラサールの突然の死は、対ビスマルク交渉のその後の彼の期待を一場の夢と化してしまったとすることができる。

さて、本稿に先立ち筆者はすでに長崎大学教養部紀要人文科学第15巻(1974)所載論文「ラサール、ビスマルクの第一回、第二回会談について」において、1863年5月11日(実はその後の研究により、12日または13日が確実なるを知った。)に行なわれた第一回会談、および6月(日時不明)に行なわれた第二回会談の内容と意義を論じ、さらに同紀要第17巻(1977)所載論文「ラサールの『閱兵演説』とゾーリンゲン電報」において、10月24日に行なわれた第三回会談に触れ、次いで既述の同紀要第18巻所載の拙稿において、第四回会談が1864年1月12日に行なわれ、第五回会談が1月末日または2月1日に行なわれたことに論及した。これらの両者会談を軸として行なわれたおよそ9か月にわたるラサールの対ビスマルク交渉について、またラサールの労働者たちに向ってのアジテーションについて、さらに1864年3月12日法廷における弁護演説について、筆者が確信を以て断言できることは、ラサールが表面上いかにビスマルクやプロイセン王国に媚を呈した言辞を弄し、再三再四ビスマルクの助力を求めたにしても、

彼はその肚の底においては徹頭徹尾ビスマルクを利用しようと企てたにすぎなかったということである。彼は言うまでもなくブルジョワジー的国家の存立を嫌悪排除しようと企てたのであるが、同時にビスマルク施政下のプロイセン王国、またはそうでなくともプロイセン王国そのものの存在をも絶対に認めてはいなかったのであり、ビスマルクを誘い込み普通直接選挙権を実現することによって、漸次に彼のめざす労働者階級政権下の国家の到来を企てていたのである。

それゆえプロイセン国家による、普通直接選挙権を前提とする生産組合への補助金のごときも、彼のめざす理想国家実現のためのさし当っての方便にすぎず、従ってこの点に関しては、碩学林健太郎氏がその論文「ビスマルクとラッサールの会談について」（筆者の怠慢ゆえに今夏初めてその存在を知った。）において、さすがに纏った論述を展開していただけるにしても、そのなかの次の論述についてののみは筆者は首肯できないのである。すなわち、「……………そしてその場合、ユンカー勢力によって掌握されるプロイセン国家はブルジョア勢力と共に打倒されるべきものであって、ラッサールのこの認識がゾーリンゲン事件以後においても一貫して続いていたことは既に見た如くである。しかし1864年初頭以来の彼の態度は明らかに異なる。これはもはや戦術の転換というべきものではなく、彼の政治行動の本質的な転換（加点は筆者。）と解さなければそれを理解することは困難であろう。つまりそれはビスマルクによって支配されるプロイセンの現国家自身に反ブルジョワ、反資本主義闘争の意義を認め、その力によって労働者階級の政権への接近の途を図ろうとするものである。」^②という論述には筆者は同調できない。「政治行動の本質的な転換」だと解するのは、少なくとも言いすぎであろう。氏の論文は、すでに40年の昔（1938）「歴史学研究」において発表されたもので、「ドイツ史論集」（1976）所載の同論文には「後記」としてシュロモ・ナアマンの論文 „Beleuchtung“ の要旨が付記紹介され、そのなかで、同氏は旧論文について他の部分では修正を少し加えられているが、要するに、同氏も認めていられる「今日におけるラッサール研究の最大の権威」ナアマンも、私が研究した限りにおいては、ラッサールの「政治行動の本質的な転換」を決して認識してはいない。このことは、偉大な思想家革命家であり、ドイツ労働組合の創始者たるラッサールの名誉のためにもあえて一言しておく次第である。

註

① Johannes Bühler, Deutsche Geschichte, Bd. V. Berlin, 1954, S. 357.

② 既述の拙稿所載紀要 p.13 の末尾, p.14 の冒頭および p.16 の末尾参照。

③ あとで触れる全内閣あての公式の訴願書の現存しているオリジナルは、実は、1864年2月7日付けとなっている。そしてこのオリジナルには、2月5日付けラッサールあて司法大臣回答書の内容の批判をも含まれている。それゆえ、この2月1日付けビスマルクあて訴願書と「同時に閣下の手許に送付された、王国の全内閣あての公式の請願書」（現存していない。）の内容は、2月7日付けのものとは少なくともいくらか異なっていたものと推察される。

- ④ 1879年裁判所構成法が実現した。(Alfred Kleinberg, Die europäische Kultur der Neuzeit, Leipzig u. Berlin, 1931, S. 135 Anm.)
- ⑤ Gustav Mayer, Bismarck und Lassalle Ihr Briefwechsel und ihre Gespräche, 1928, Berlin. (以下 „Bismarck und Lassalle“ と略記する。) S.65-77. 所載.
- ⑥ この方策は、ラサールの „Punktationen“ (規約案) の最後の「選挙法の側面を掩護するための第3項目」をさしており、その具体的な内容は、現代におけるラサール研究の第一人者、シュロモ・ナアマンによると、「おそらく通信事務の国有化を意味していると理解される。」(1962年 Hannover, Verlag für Literatur und Zeitgeschehen, 発行 „Archiv für Sozialgeschichte“——Jahrbuch der Friedrich-Ebert-Stiftung——Bd., II, S. 55-85 に掲げられた Shlomo Na'aman の論文 „Lassalles Beziehungen zu Bismarck — ihr Sinn und Zweck“ サブタイトル „Zur Beleuchtung von Gustav Mayers ≧Bismarck und Lassalle≦“——以下この論文を „Beleuchtung“ と略記する。——S. 68)
- ⑦ Bismarck und Lassalle, S. 89f.
- ⑧ Bastiat, Claude Frédéric, 1801-1850, フランスの経済学者, 自由貿易論者. 二月革命以来, 社会主義の反対者として多くのパンフレットを書いた。(岩波書店, 西洋人名辞典 p.1025). Der „Julian“, den ich 1862 veröffentlichte,¹⁾ war eine Erhebung gegen den literalischen Mob.²⁾(Eduard Bernstein 編 „Ferdinand Lassalle Gesammelte Reden und Schriften“——以下 „Reden und Schriften“ と略記する——12 Bde., 1919-1920, Bd V. Vorwort, S. 21), 1) „Herr Julian Schmidt, der Literaturhistoriker.“ 2) „Mob“ ist ein aus dem Englischen genommenes Wort, das dort für „Menge“, der gemeine Haufen etc. gebraucht wird (ibid. S. 21 Anm.)
ラサールのこの著述は, Reden und Schriften, Bd. V, S. 21-355 に載っている。「ラサールは, マルクスが資本論の出版に大きな期待をおいていたのと同じように, „Bastiat-Schulze“ (注, 彼の経済学的主著) に大きな期待をおいた。」(Beleuchtung, S. 79). ベルンシュタインが全ドイツ労働者協会 (Allgemeiner Deutscher Arbeiterverein) いわゆる A D A V のベルリン代表メッツナーの遺品に基づいて公刊した回状のなかで, ラサールは理論的運動のさし当っての結果にはかならないものについて語っている。この回状によると, 運動はこの本によって, 自由民主主義的伝統から独立した法典を受け取り, 民主主義的選挙権の導入のための基礎づけは, この本によって与えられる。(cf. E. Bernstein, Ferdinand Lassalle über seinen Bastiat-Schulze, in: „Neue Zeit“ Bd. 32/II, S. 846-854)
- ⑨ Reden und Schriften, Bd. V, S. 340-355に載っている。
- ⑩ このことは行なわれた。曾ての革命家アウグスト・プラス(1818年生まれ)は, 半官的な „Norddeutsche Allgemeine Zeitung“ の編集長であった。「この新聞は, 1848年の生粋の共和主義者 August Brass によって大ドイツ民族主義の機関紙として設立されたが, 急速にビスマルクの陣営に移った。」(Franz Mehring, Geschichte der deutschen Sozialdemokratie (1897-1898), Berlin, 1960, 2Bde.——以下 „Mehring“ と略記する。——Bd. II, S. 106). ラサールが, この半官的な新聞にこの著作を紹介してもらったことは, もとより検事による押収を免れるための一手段であった。
- ⑪ 「ビスマルクは, 以前のこの外務大臣, 彼の前任者のなかに, 彼自身に敵意を懷いている王妃 Augusta の『被造物』, すなわち『自己の政治的信念なき, 王妃に従属している佞臣』を認めた。」(Bismarck und Lassalle, S. 104 Anm.) (cf. Bismarck, Gedanken und Erinnerungen, 1898, Bd. I S. 281ff.)
- ⑫ Bismarck und Lassalle, S. 103ff.
- ⑬ „Er ist der Mann noch nicht, mit dem Teufel Kirschen zu essen!“ (Gustav Mayer 編 „Ferdinand Lassalle Nachgelassene Briefe und Schriften“——以下 „Nachlass“ と略記する。——Bd. 4, S. 353) 「これまで単に口伝てに伝えられていたラサールの言葉は, この手紙によって歴史的な確証を得ている。」(ibid. S. 353 Anm.)
- ⑭ Beleuchtung, S. 79 Anm.

- ⑮ ibid. 80
- ⑯ ibid. S. 80
- ⑰ 全文ラサールの筆跡。ラサールの表題と署名が付いている。
- ⑱ Bismarck und Lassalle, S. 90-96
- ⑲ マイアーによると、オリジナルは存在しない。句読点が意味に従って付けられた。というのは、伯爵夫人は句読点を一つも付けていなかったため。
- ㉔ このことは、ビスマルクがツィーテルマンに対して、ラサールの願望が今回与えられるかどうかを調べるために、すでに印刷された折帳を持って来させるよう命じたことを暗示している。(cf. Bismarck und Lassalle, S. 48)
- ㉕ 既述のラサールの経済学的主著 „Herr Bastiat-Schulze von Delitzsch, der ökonomische Julian, oder Kapital und Arbeit“ をさす。
- ㉖ この「写し」には署名がない。
- ㉗ Bismarck und Lassalle, S. 105f.
- ㉘ cf. Bismarck und Lassalle, S. 106
- ㉙ ibid. S. 48
- ㉚ ibid. S. 106
- ㉛ ibid. S. 108
- ㉜ 1793年6月2日、恐嚇政治の初まり。この日パリに一揆が起り、パリ市民はコンミュン（1792年8月9日パリ全市48区の代表者から成る反乱的な市自治委員会）の指揮下に議場を包囲してジロンド党代議士を放逐し、以後ジャコバン党独裁の時期に入った。（西海太郎、フランス革命史、史学教材 p. 50 参照）
- ㉝ テル・アヴィブ大学教授 Shloms Na'aman, Lassalle (1970, Verlag für Literatur und Zeitgeschehen, Hannover——以下 „Na'aman“ と略記する。——S. XI.)
- ㉞ マイアーによると（以下この語を略す。）。初めラサールは、über welche ich das Motiv. と書いた。
- ㉟ ここでラサールは、jetzt という言葉を、線を引いて消している。
- ㊱ ラサールによりアンダーラインが引かれている。
- ㊲ もとは、„Scheint“ としてあった。
- ㊳ 初めは、„ganz“ としてあった。
- ㊴ ここから筆跡が、そして確かにインキもまたいくらか変っている。それゆえ、手紙の草稿はおそらく同日に完成されたのでも、始められたのでもないとは仮定できそうである。
- ㊵ 初めは、von völlig fremder Hand となっていた。
- ㊶ ラサールは初めこれを書き、„an Exzellenz von Bismarck, nicht an“ と書き、その間に書き添えたのち、ふたたび元に戻した。
- ㊷ 前には、Vermittler となっていた。
- ㊸ 最初ラサールは、„zugeschickt werden“ と書いた。
- ㊹ 署名が欠けている。
- ㊺ Bismarck und Lassalle, S. 107f.
- ㊻ 尤も、「ビスマルクは、ラサールの理論的な主著 „Bastiat-Schulze“ の押収を防ぎ、そのことに依ってラサールが運動の制限から免かれて広く影響を及ぼすのを可能にした。„Bastiat-Schulze“ がなかったとしたら、なお多年古典的社會主義に対する挑戦であった独特のラサール主義 (Lassalle-anismus) は起らなかったであろう。」(Beleuchtung, S. 78) この点に、ラサールの対ビスマルク交渉の一つの重要な意義を認めてよいと思う。
- ㊼ Bismarck und Lassalle, S. 49
- ㊽ Na'aman, S. 721
- ㊾ Nachlass, Bd. 5, S. 280
- ㊿ Reden und Schriften, Bd. IV, S. 59-174 に載っている。

- ④⑦ ibid. S. 174
- ④⑧ Bismarck und Lassalle, S. 50
- ④⑨ cf. N. Rjasanov, Briefe Lassalles an Moses Hess in Archiv für Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung, Bd. II (1913), S. 814ff. なお, Edmund Silberner, Moses Hess Briefwechsel, 1959, Amsterdam には, この手紙は載っていない。
- ⑤⑩ Reden und Schriften, Bd. IV. S. 155
- ⑤⑪ ibid. S. 159
- ⑤⑫ ibid. S. 159
- ⑤⑬ ibid. S. 163
- ⑤⑭ Bucher an Lassalle 6. März. (Bismarck und Lassalle, S. 51 Anm.) この手紙の日付けについての, Heinrich von Poschinger, Lothar Buchers Leben und Werke, 1894, のなかの誤りに関しては, Vgl. Richard August, Bismarcks Stellung zum parlamentarischen Wahlrecht, 1917, S. 50
- ⑤⑮ Bismarck und Lassalle, S. 51. マイアーはこの言葉をどこから引用したのか不明である。(弁護演説のなかでは, Reden und Schriften, Bd. IV, S. 119 に, Verfassungsumsturz なる語が見えるのみである。)
- ⑤⑯ Na'aman, S. 721
- ⑤⑰ Carl Grünberg 編 Archiv für die Geschichte des Sozialismus und Arbeiterbewegung, 15 Bde. 1910-1930, 再版1966 (以下 „Grünbergs Archiv“ と略記する。) Bd. I, S. 191f.
- ⑤⑱ Na'aman, S. 722
- ⑤⑲ Reden und Schriften, Bd. IV, S. 159
- ⑥⑩ ibid. S. 154
- ⑥⑪ Bismarck und Lassalle, S. 52
- ⑥⑫ Na'aman, S. 722
- ⑥⑬ cf. Grünbergs Archw, Bd. III, S. 138f., Edmund Silberner, Moses Hess Briefwechsel, 1959, Amsterdam, S. 468
- ⑥⑭ Bismarck und Lassalle, S. 45
- ⑥⑮ Mehring, Bd. II, S. 146
- ⑥⑯ Nachlass, Bd. 5, S. 280
- ⑥⑰ Nachlass, Bd. 6, S. 378
- ⑥⑱ 1929年以来ケルン市の北約40キロ, Wuppertal 市 (人口, 1972年413,200人) の一市区となった。(Brockhaus Enzyk.)
- ⑦① Mehring, Bd. II, S. 146f.
- ⑦② Nachlass, Bd. 4, S. 353
- ⑦③ ibid, S. 355f.
- ⑦④ これより先, 「アメリカ南北戦争のため生産を停止させられたシュレーゲンの織物を業とする村々からの代表団がベルリンに派遣され, 謁見の保証もなく一か月間首都に滞在した。その一人であるウステギールドルフのフロリアン・パウル (Florian Paul, 注, A D A V の会員) はラサールの許に來た。ビスマルクは, パウルが自分に会いに來たのだと考えていたが, もし謁見を拒めば却って彼のスキャンダルとなる脅れがあったので, 激しい内心の抵抗を抑えて国王への謁見を実現したのであるこの謁見は, ラサールが直ちにそれを十分に利用したからだけではなく, 慎重を欠いて整理された国王の言葉が, 意図されたより以上のことを言っているように思われたので, その後有名となった。ラサールはロンスドルフで官の『養蜂家新聞通信』(Zeitlersche Korrespondenz) の文章を文脈から切りはずすことなく音読し, 次のような祝いの言葉で終ることができた。」(Na'aman, S. 727)。「陛下は, この問題のできる限り早い立法的规定とそれによるかれらの困窮の救済という慰めをもって派遣団員を去らせた。国王の確約はリーゼン山脈のあらゆる谷間で鼓舞激励的にこだまし, 何百と

いう忍苦している実直な家族たちに、勇敢な辛抱のための新たな希望と新たな活力を与えるであろう。」(Reden und Schriften, Bd. IV, S. 220). 加うるに、「謁見の翌々日ビスマルクによる引見が行なわれ、アジテーション、請願の自由、並びに生産組合の創立、解雇者の復職が約束された。ビスマルクは、内閣そのものの内部における抵抗を克服し得るために、大衆による圧力を正式に鼓舞するように思われた。彼は織工との歓談において、全く厚かましくラサールの形式を利用した。」(Na'aman, S. 727)

- ⑦③ この点に関連してナアマンの次の所論が注目される。「1864年5月11日付けハッツフェルト伯爵夫人あてラサールの手紙(Nachlass, Bd. 4, S. 353f.)によると、当時の時点においては、組合を実験することは、ラサールにとっては一つの牽制作戦であると思われ、従ってビスマルクとの会談におけるラサール独得の提案は、なんら実践的役割ではなくて、精々のところ理論的役割を演じているにすぎない。ラサールがロンズドルフ演説において、織工代表団が立法的救済方策への道を示す一方で、事実上それは生産組合実験への糸口と考えられていたがゆえに、この代表団の意義を混和させたということは、全くこれと相応じている。ラサールがシュレーゲンにおいて実験がもし実施された場合彼の運動を育成するであろうがゆえに、組織原理の下における実験そのものを評価したということは、上述のことがらと矛盾しない。」(Beleuchtung, S. 84)
- ⑦④ „Die Agitation des Allgemeinen Deutschen Arbeitervereins und das Versprechen des Königs von Preussen“ (Reden und Schriften, Bd. IV, S. 175-242に載っている。) 既述のごとく、一般に、„Ronsdorfer Rede“ と呼ばれている。
- ⑦⑤ Mehring, Bd. II, S. 147
- ⑦⑥ このときビスマルクは「貧者の王」(le roi des gueux)なる言葉を用いている。(Otto von Bismarck 旧版 Die ges. W. Bd. 12, S. 316, 461)
- ⑦⑦ カール・アレキシ (Karl Alexi, 1840-1888, 歴史家, 古典語学者) は、1864年8月2日ラサールあての手紙(オリジナル)のなかで次のように述べている。この時点でこれを読んだラサールは、定めしみずからの無力を感じたことと察せられる。「ビスマルクは彼の成果によって傲慢となり、労働者たちとまやかしの勝負をやっている。やがて我々は彼を自由主義者たち以上に恐れねばならなくなるでしょう。というのは、彼との闘争は一層大きな犠牲を払うことになりましょう。あなたは依然として社会主義的王国 (sozialistisches Königtum) に希望を持っていますか。」(Nachlass, Bd. 5, S. 357). 序でながら、「ラサールはその遺言状のなかでアレキシに対し次のように感謝している。『アレキシ君は私の蔵書のなかから100冊を選択してよろしい。』」(ibid. S. 357 Anm.)
- ⑦⑧ Beleuchtung, S. 73
- ⑦⑨ Reden und Schriften, Bd. IV, S. 221f.
- ⑧⑩ Mehring, Bd. II, S. 148
- ⑧⑪ Beleuchtung, S. 80
- ⑧⑫ この反論は、„Erwiderung auf eine Rezension der Kreuzzeitung über das Buch: Herr Bastiat-Schulze von Delitzsch, der ökonomische Julian. Von Ferdinand Lassalle.“ と題して、Reden und Schriften, Bd. V, S. 365-381に載っている。なお、この反論の日付けは、パート・エムス6月2日であるが、「6月19日 „Die Theorie des assoziierten sozialistischen Mittelstandes“ として発表された。」(Na'aman, S. 869)
- ⑧⑬ ビスマルクは、1878年9月17日帝国議会での演説において、ラサールを評して、„Er hatte eine sehr ausgeprägte nationale und monarchische Gesinnung“ と述べている。(Bismarck Die ges. W., Bd. 11, S. 606). この発言がビスマルクの本心であったか、それとも政略的な言葉であったかは判然としない。
- ⑧⑭ この反論の終りに近い一節でラサールは次のごとく論じている。「私がとりわけ獲得に努めているように、最も平和的な方法で普通直接選挙権の導入によって、すなわち国家権力の更に広い担い手によって、私により要求されている „Verbindung von Kapital und Arbeit“ を通じて単に国民のなかの中産階級のみならず全国民そのものを包括する中産階級を創り出すかの社会的改造を招来するこ

とに成功する時。——批評家君は、これは現存する国家並びに社会の歴史的な変形であるのか、それとも非歴史的変形であるのかと言うであろう。」云々。(Reden und Schriften, Bd. V, S. 380f.)

- ⑧5 ラサールはリーギ・カルトバートからハッツフェルト伯爵夫人あて 7 月 28 日付けの手紙のなかで、「私はハンブルクで現状に圧力 (Druck auf die Ereignisse) をかけたいと企てています！」と述べている。(Nachlass, Bd. 4, S. 370)
- ⑧6 ラサールはリーギ・カルトバートからハッツフェルト伯爵夫人あて 7 月 27 日付けの手紙のなかで、「私が大きな、きわめて大きな、おそらくほんとうに重大な^{わざ}業を行ないたいハンブルクに前もって行っていない必要ありません！ それゆえ 9 月 20 日にはスイスを去らねばなりません。」と決意を述べている。(ibid. S. 367). 「ラサールは両公国のプロイセンへの併合のためのアジテーションを開始しようとして望んでいた。」(ibid. S. 367 Anm.)
- ⑧7 Mehring, Bd. II, S. 149ff.
- ⑧8 cf. ibid. S. 152f.
- ⑧9 ヘレーネ (1843-1911) の父 Wilhelm von Ritter は 1841 年ベルリン大学歴史学教授, 1842 年以来, バイエルン国王 Maximilian 2 世 (ランケの御前講演で名高い.) の太子時代の親友, 顧問.(Brockhaus Enzyk.)
- ⑨0 cf. Mehring, Bd. II, S. 153f.
- ⑨1 Na'aman, S. 779
- ⑨2 林健太郎氏著「ドイツ史論集」(中央公論社, 昭和 51 年発行) p. 168-169

(昭和 53 年 9 月 25 日受理)